引退前の活動が指導者以外の職業選択に与えた影響について
― JFL 退団選手サブ・エリートとノン・エリートに着目して ―

スポーツクラブマネジメント研究領域
5023A301-8 赤星 佐和子　　研究指導教員: 間野 義之 教授

1. 緒 言

スポーツ選手の競技人生において避けて通れないのが「引退」である. スポーツ庁は 2017 年 3 月「第 2 期スポーツ基本計画」を公表しアスリートのキャリア形成についてスポーツの関係団体及び教育機関, 経済団体が連携しデュアルキャリアの取組みを促進するとしている.

JOC(日本オリンピック委員会)では 2010 年より「アスナビ」と言われる無料職業紹介事業を開始し, トップアスリートが就職によって生活を安定させ, 仕事を通して社会人基礎力を身に付けられるよう企業と選手とのマッチングをサポートしている. また日本プロサッカー選手会(JPFA)では, セカンドキャリアに関する支援として就学支援金制度を設け, サッカー指導者やビジネス関連の資格取得などにかかった費用の一部を補助している. このようにオリンピック出場を目指すトップアスリートやプロスポーツ選手のデュアルキャリアやセカンドキャリア支援は進みつつある.

一方, プロではない下位カテゴリーに所属する選手はトップ選手のようなサポートが見込めない状況でセカンドキャリアに向けて現役中にどのような活動をしているのか. 本研究では J3(プロサッカーリーグ)の直下に位置するアマチュア最上位リーグであるJFL(日本フットボールリーグ)退団選手に焦点を当て, セカンドキャリアを視野にどのような活動を行い, 競技関連職以外の職業選択にどのような影響を与えているのかを把握することとした. 2022 年シーズンの JFL 選手登録区分によると登録選手 468 名のうちプロ契約選手は 166 名(35%), アマチュア契約選手は 299 名(64%)と同リーグにプロとアマチュアの選手が混在している. アマチュア契約選手とは報酬または利益を目的とすることなくプレーする選手である. このような背景からJFLは「サッカー選手をしながら働く」という特徴を持ち合わせており, 企業クラブはもとより, 地域スポーツクラブ所属のアマチュア選手の多くはスポンサー企業などでアルバイトや社員として働きながら競技をしていることが特筆すべき点である. また移籍や契約終了によってJ2 から J3, そして JFL へと上位カテゴリーから下位カテゴリーに移行して競技を続ける者が含まれ多様な競技レベルの選手が混在している. 彼らの中には中学年代, 高校年代にJリーグ上位クラブの下部組織に所属していた者や高校の全国大会で上位の成績を残した者そして大学時代にJクラブの強化指定選手であったなど, 競技レベルの高さがうかがえる選手も含まれている. 一方で主な実績はなく自らの競技レベルに合ったクラブで出場機会を優先してプレーをする選手もおり, 前者とは一線を画す.

本研究では前者を【サブ・エリート】, 後者を【ノン・エリート】と分類して彼らの引退前の活動に着目し, セカンドキャリアを視野にどのような活動を行っているのか. その活動内容と職業選択との関係性ついて明らかにする. 彼らがセカンドキャリアを視野にどのような活動を行い, 競技関連職以外の職業選択にどのような影響を与えているのかを把握することは, 将来引退に直面する選手たちの道標となり引退後のスムーズなキャリアトランジションに寄与することが期待される.

2. 目　的

本研究では JFL(日本フットボールリーグ)の退団選手サブ・エリートとノン・エリートの引退前の活動に着目し，セカンドキャリアを視野にどのような準備を行っていたのか．その活動と競技関連職以外の職業選択との関係性ついて明らかにする．

3. 調査方法

半構造化面接法によるインタビュー調査を実施した．競技引退前からセカンドキャリアの選択までを【引退前】【引退】【移行期間】【セカンドキャリア】の4つに区切り，時系列に沿って現役中の具体的な活動内容，引退理由，引退後の職業選択について調査を実施した．対象者は JFL クラブを 5 年以内に退団した選手 11 名である．JFL で競技を引退した者，または JFL を経由して地域リーグ，海外リーグで競技を継続したのち引退した者であり，引退後，競技関連職以外の職業に就いた者を対象とした．

4. 分析方法

分析方法は，Mayring が構造化した質的内容分析を援用し，インタビューの中で重要な部分については，まず要約的内容分析を行い重要な言葉を抜粋した．次に，説明的内容分析を行い，最後に構造化内容分析を行った．要約的内容分析とは本質的な内容はそのままに扱いやすい短い文章にまとめる方法であり，説明的内容分析は不明瞭な文章を追加の情報で説明していく方法である．そして構造化内容分析は特定の部分を抽出しあらかじめ決められた順序尺度をもとに横断図を作る方法である．なお質的研究においては筑波大学大学院，京都大学大学院の修士取得者 2 名と逐語録の重要な部分を抜粋し時系列ごとに抽出したカテゴリーと概念を話し合い信頼性と妥当性の確保に努めた．

5. 結　果

対象者 11 名中 9 名は資格取得に必要な学習や，サッカー関連以外の業界で働くための情報収集およびトレーニングなど引退後の職業選択に備えて何らかの活動を行っていたことがわかった．また競技をしながらアルバイトや社員として所属クラブのスポンサー企業で働く選手の中には，就業先での営業や事務経験が職業人としての基本的なスキル獲得につながっているケースも見られた．

6. 考　察

引退前から競技以外の世界を知る人との関係づくり，現役中の就業経験から社会人として必要なスキルを習得しようとする意欲的な態度，自分を振り返り人生観の整理をするなど競技以外の時間を自分の将来のために使うことは【引退】【移行期間】【セカンドキャリア】の局面にポジティブな影響を与えている．特に移行期における【やりたいことの探求】【セカンドキャリアの摸索】【求職活動】を引退前に辿ることも可能であること．また引退前の時間を有意義に過ごすことで選手は競技生活との折り合いや調整，競技生活の区切りも主体的にスムーズに行えている．

7. 結　論

引退前の活動については【競技以外の人との関係づくり】【就業経験】といった選手の行動特性が明らかになった．これらの経験を通じて現役中に次のキャリアや自分の適職を摸索しており，引退後の職業選択に影響を与えていることが明らかにされた．特に移行期における【やりたいことの探求】【セカンドキャリアの摸索】【求職活動】を引退前に辿ることも可能であること，また引退前の時間を有意義に過ごすことで選手は競技生活との折り合いや調整，競技生活の区切りを主体的にスムーズに行えていることも明らかとなった．競技以外の時間を自分の将来のために使うことは【引退】【移行期間】【セカンドキャリア】の各局面にポジティブな影響を与えていることが明らかになった．

8. 本研究の限界

本研究では国内アマチュアサッカーリーグの退団選手を対象としており，他競技への応用や，デュアルキャリアが競技パフォーマンスに与える影響までは明らかにされなかった．今後も更なる探究が必要である．